

I

- (1)

ア

 $r^2 + 2pqr + (pq)^2$

イ

 $(pq)^{n-k}$

ウ

 r^n

エ

 st
- (2)

オ

 2

カ

 6

キ

 6

ク

 5

ケ

 22

コ

 142

(1) 問題より, $x = pq + r$ と表せるので

$$x^2 = (pq + r)^2 = \underline{r^2 + 2pqr + (pq)^2} \cdots (\mathcal{A})$$

n を自然数として, x^n について同様に考えると

$$\begin{aligned} x^n &= (pq + r)^n \\ &= {}_n C_0 (pq)^n \cdot r^0 + {}_n C_1 (pq)^{n-1} \cdot r^1 + {}_n C_2 (pq)^{n-2} \cdot r^2 + \cdots \\ &\quad \cdots + {}_n C_{n-1} (pq)^1 \cdot r^{n-1} + {}_n C_n (pq)^0 \cdot r^n \\ &= \sum_{k=0}^n {}_n C_k \underline{(pq)^{n-k}} r^k \cdots (\mathcal{I}) \end{aligned}$$

よって,

$$x^n = pq \sum_{k=0}^{n-1} {}_n C_k (pq)^{n-k-1} r^k + r^n$$

と表せ, $\sum_{k=0}^{n-1} {}_n C_k (pq)^{n-k-1} r^k$ は整数であるから,

$$x^n \text{ を } p \text{ で割った余りは } \underline{r^n} \cdots (\mathcal{U}) \text{ を } p \text{ で割った余りと等しい.}$$

自然数 i, j に対して x^i を p で割った余りを s , x^j を p で割った余りを t とすると

$$x^i = pS + s, \quad x^j = pT + t \quad (S, T \text{ は整数})$$

と表せるので

$$x^{i+j} = x^i \cdot x^j = (pS + s) \cdot (pT + t) = p(pST + St + Ts) + st$$

よって, $pST + St + Ts$ は整数であるから,

$$x^{i+j} \text{ を } p \text{ で割った余りは } \underline{st} \cdots (\mathcal{I}) \text{ を } p \text{ で割った余りと等しい.}$$

[2] $31 = 7 \cdot 4 + 3$ と [1] の **ウ** より,

「 31^2 を 7 で割った余りは 3^2 を 7 で割った余りと等しい」

ので, 31^2 を 7 で割った余りは **2**... (**オ**) である.

31 を 7 で割った余りが 3, 31^2 を 7 で割った余りが 2 であるから, [1] の **エ** より,

「 31^3 を 7 で割った余りは $3 \cdot 2$ を 7 で割った余りと等しい」

ので, 31^3 を 7 で割った余りは **6**... (**カ**) である.

これらのことより,

31^4 を 7 で割った余りは $3 \cdot 6$ を 7 で割った余りと等しく 4

31^5 を 7 で割った余りは $3 \cdot 4$ を 7 で割った余りと等しく 5

31^6 を 7 で割った余りは $3 \cdot 5$ を 7 で割った余りと等しく 1

31^7 を 7 で割った余りは $3 \cdot 1$ を 7 で割った余りと等しく 3

とわかるので, 自然数 k について, 31^k を 7 で割った余りは

3, 2, 6, 4, 5, 1

を繰り返す.

よって, 31^k を 7 で割った余りが 1 となるのは, k が **6**... (**キ**) の倍数となるときである.

同様に考えると, 31 を 11 で割った余りは 9 であるから

31^2 を 11 で割った余りは $9 \cdot 9$ を 11 で割った余りと等しく 4

31^3 を 11 で割った余りは $9 \cdot 4$ を 11 で割った余りと等しく 3

31^4 を 11 で割った余りは $9 \cdot 3$ を 11 で割った余りと等しく 5

31^5 を 11 で割った余りは $9 \cdot 5$ を 11 で割った余りと等しく 1

31^6 を 11 で割った余りは $9 \cdot 1$ を 11 で割った余りと等しく 9

とわかるので, 自然数 k について, 31^k を 11 で割った余りは

9, 4, 3, 5, 1

を繰り返す.

よって, 31^k を 11 で割った余りが 1 となるのは, k が **5**... (**ク**) の倍数となるときである.

以上より, 31^k を 7 で割った余りが 4 となるのは $k = 6l - 2$ (l は自然数) のときで, 31^k を 11 で割った余りが 4 となるのは $k = 5m - 3$ (m は自然数) のときとわかる.

$6l - 2 = 5m - 3$ を満たす自然数 l, m を求めると

$$6l - 5m = -1$$

$$6(l + 1) - 5(m + 1) = 0$$

$$6(l + 1) = 5(m + 1)$$

5 と 6 は互いに素であるから, 自然数 a を用いて

$$l + 1 = 5a, m + 1 = 6a$$

$$\therefore l = 5a - 1, m = 6a - 1$$

よって, 31^k を 7 で割った余りと 11 で割った余りがともに 4 になる自然数 k は

$$k = 6(5a - 1) - 2 = 30a - 8 \quad (k = 5(6a - 1) - 3 = 30a - 8)$$

とわかるので,

自然数 k で最小のものは, $a = 1$ のときで $k = 30 - 8 = \underline{22} \dots$ (ケ)

自然数 k で 5 番目に小さいものは, $a = 5$ のときで $k = 30 \cdot 5 - 8 = \underline{142} \dots$ (コ)

II

- (1) ア $(1+p^2)\vec{a} - p^2\vec{b}$ イ $p^2\vec{b}$ ウ p^4
- (2) エ $(1+p^2)\vec{a} - p^2(1+p^2)\vec{b}$ オ $\frac{1}{1-p^2}$ カ $\frac{1}{1-p^2}$
- (3) キ $\frac{1}{2}\vec{a} + \frac{1}{2}\vec{b}$ ク $\frac{2p}{1+p^2}$

■ 解説 □

$\vec{OA} = \vec{a}$, $\vec{OB} = \vec{b}$ とし、 $|\vec{b}| = 1$, $|\vec{a}| = p$ ($0 < p < 1$)

[1] 線分 AB を $p^2 : (1+p^2)$ に外分する点を A_1 とするので

$$\vec{OA_1} = \frac{(1+p^2)\vec{a} + (-p^2)\vec{b}}{-p^2 + (1+p^2)} = \underbrace{(1+p^2)\vec{a} - p^2\vec{b}}_{\text{ア}}$$

点 O_1 を

$$\vec{OO_1} = \vec{OA_1} - p^2\vec{a} = \vec{a} - p^2\vec{b}$$

を満たすようにとるので

$$\vec{O_1A} = \vec{OA} - \vec{OO_1} = p^2\vec{b}$$

$$\vec{O_1A_1} = \vec{OA_1} - \vec{OO_1} = p^2\vec{a}$$

$\triangle OAB \sim \triangle O_1A_1A$ であり、相似比は $1 : p^2$, 面積比は $1^2 : (p^2)^2 = 1 : p^4$

よって、 $\triangle O_1A_1A$ の面積は $\triangle OAB$ の面積の p^4 倍である。

[2] [1] と同様にすることから、[1] で点 O を O_1 , 点 A を A_1 , 点 B を A とすることを考えて

$$\begin{aligned} \vec{O_1O_2} &= \vec{O_1A_1} - p^2\vec{O_1A} = p^2\vec{a} - p^4\vec{b} \\ &= p^2(\vec{a} - p^2\vec{b}) = p^2\vec{OO_1} \end{aligned}$$

これより

$$\begin{aligned} \vec{OO_2} &= (1+p^2)\vec{OO_1} = (1+p^2)(\vec{a} - p^2\vec{b}) \\ &= \underbrace{(1+p^2)\vec{a} - p^2(1+p^2)\vec{b}}_{\text{エ}} \end{aligned}$$

次に

$$\triangle O_1A_1A \sim \triangle O_2A_2A_1,$$

$$\triangle O_{n-1}A_{n-1}A_{n-2} \sim \triangle O_nA_nA_{n-1} \quad (n = 3, 4, \dots)$$

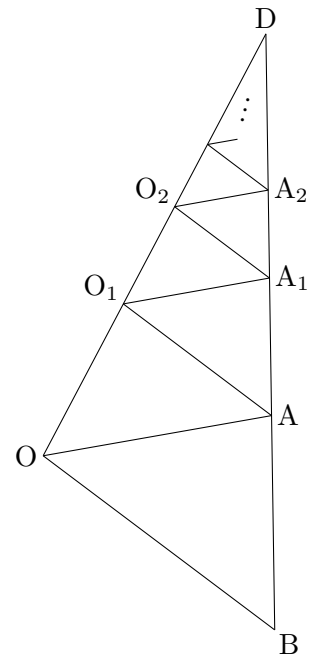
であり、いずれも相似比は $1 : p^2$ である。

直線 AB と直線 OO_1 の交点を D とするので、 $\lim_{n \rightarrow \infty} |\vec{A_nD}| = 0$ を

用いて

$$\begin{aligned} |\vec{BD}| &= BA + AA_1 + A_1A_2 + \dots \\ &= |\vec{AB}| + p^2|\vec{AB}| + p^4|\vec{AB}| + \dots = \underbrace{\frac{1}{1-p^2}}_{\text{オ}} |\vec{AB}| \end{aligned}$$

(\because 初項が $|\vec{AB}|$, 公比が p^2 ($0 < p^2 < 1$) の無限等比級数)



O, O_1, O_2, \dots は同一直線上にあり、線分の比 $OO_1 : O_1O_2 = 1 : p^2$,
 $O_{n-2}O_{n-1} : O_{n-1}O_n = 1 : p^2$ ($n = 3, 4, \dots$), $\lim_{n \rightarrow \infty} |\overrightarrow{O_n D}| = 0$ を用いて

$$|\overrightarrow{OD}| = OO_1 + O_1O_2 + O_2O_3 + \dots = |\overrightarrow{OO_1}| + p^2 |\overrightarrow{OO_1}| + p^4 |\overrightarrow{OO_1}| + \dots$$

$$= \frac{1}{1-p^2} |\overrightarrow{OO_1}|$$

(\because 初項が $|\overrightarrow{OO_1}|$, 公比が p^2 ($0 < p^2 < 1$) の無限等比級数)

[3] $\angle AOB = 90^\circ$ とするので $\vec{a} \cdot \vec{b} = 0$

点 E は直線 AB 上にあるので、実数 t を用いて $\overrightarrow{OE} = (1-t)\vec{a} + t\vec{b}$ と表せる.

$$\begin{aligned} \overrightarrow{OE} \cdot \overrightarrow{OO_1} &= \{(1-t)\vec{a} + t\vec{b}\} \cdot (\vec{a} - p^2\vec{b}) \\ &= (1-t)|\vec{a}|^2 - p^2t|\vec{b}|^2 \\ &= p^2(1-t) - p^2t = p^2(1-2t) \end{aligned}$$

$\overrightarrow{OE} \perp \overrightarrow{OO_1}$ であるから $\overrightarrow{OE} \cdot \overrightarrow{OO_1} = 0$ なので $t = \frac{1}{2}$

よって $\overrightarrow{OE} = \frac{1}{2}\vec{a} + \frac{1}{2}\vec{b}$

これより、点 E は線分 AB の中点である.

次に、 $OA : AO_1 = OB : AO = 1 : p$ かつ $\angle AOB = \angle O_1AO = 90^\circ$ より、
 $\triangle OAB \sim \triangle AO_1O$ であることから、 $|\overrightarrow{OO_1}| = p|\overrightarrow{AB}|$

[2] より $|\overrightarrow{OD}| = \frac{1}{1-p^2} |\overrightarrow{OO_1}| = \frac{p}{1-p^2} |\overrightarrow{AB}|$

また、 $|\overrightarrow{ED}| = |\overrightarrow{BD}| - |\overrightarrow{BE}| = \frac{1}{1-p^2} |\overrightarrow{AB}| - \frac{1}{2} |\overrightarrow{AB}| = \frac{1+p^2}{2(1-p^2)} |\overrightarrow{AB}|$

よって $\frac{|\overrightarrow{OD}|}{|\overrightarrow{ED}|} = \frac{2p}{1+p^2}$

ク の **別解**

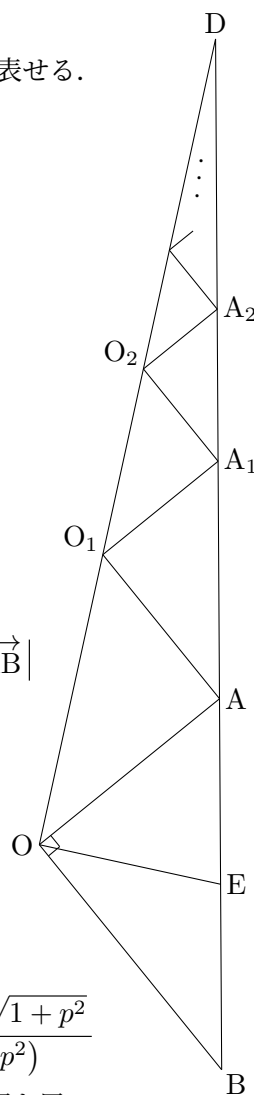
$\triangle OAB$ に三平方の定理を用いて $|\overrightarrow{AB}| = \sqrt{1+p^2}$

[2] より $|\overrightarrow{ED}| = |\overrightarrow{BD}| - |\overrightarrow{BE}| = \frac{1}{1-p^2} |\overrightarrow{AB}| - \frac{1}{2} |\overrightarrow{AB}| = \frac{(1+p^2)\sqrt{1+p^2}}{2(1-p^2)}$

$OA = p, O_1A = p^2, \angle OAO_1 = 90^\circ$ であるから $\triangle OAO_1$ に三平方の定理を用いて、
 $|\overrightarrow{OO_1}| = p\sqrt{1+p^2}$

[2] より $|\overrightarrow{OD}| = \frac{1}{1-p^2} |\overrightarrow{OO_1}| = \frac{p\sqrt{1+p^2}}{1-p^2}$

よって $\frac{|\overrightarrow{OD}|}{|\overrightarrow{ED}|} = \frac{2p}{1+p^2}$



III

解答

- (1) ア 0 イ 2 ウ $4e^{-2}$
 (2) エ $a < 1$ オ $2 - \sqrt{2-a}$
 (3) カ -2 キ $a < -1$ ク e^2

解説

アとイ $a = 0$ だから,

$$f'(x) = 2xe^{-x} - x^2e^{-x} = -x(x-2)e^{-x}$$

となり, この符号は $-x(x-2)$ の符号と一致する. よって, $f(x)$ の増減は以下のようになる.

x	$(-\infty)$	\dots	0	\dots	2	\dots	(∞)
$f'(x)$			-	0	+	0	-
$f(x)$			\searrow	極小	\nearrow	極大	\searrow

よって, $f(x)$ の極小値を与える x は $x = 0$ であり, 極大値を与える x は $x = 2$ である.

ウ

$$\int_0^2 f'(x) dx = [f(x)]_0^2 = f(2) - f(0) = \underline{4e^{-2}}$$

エ $f(x)$ を x で微分すると,

$$f'(x) = 2xe^{-x} - (x^2 + a)e^{-x} = (-x^2 + 2x - a)e^{-x}$$

であるから, $f'(x) = 0$ を言い換えると,

$$x^2 - 2x + a = 0$$

となる.

この x の 2 次方程式が異なる 2 つの実数解をもつための条件を求めればよく, それは

$$\begin{aligned} (-1)^2 - a &> 0 \\ a &\leq 1 \end{aligned}$$

である.

オ $f'(x)$ を x で微分すると,

$$\begin{aligned} f''(x) &= (-2x + 2)e^{-x} - (-x^2 + 2x - a)e^{-x} = (x^2 - 4x + a + 2)e^{-x} \\ &= \{x - (2 - \sqrt{2-a})\}\{x - (2 + \sqrt{2-a})\}e^{-x} \end{aligned}$$

であり, この符号は

$$\{x - (2 - \sqrt{2-a})\}\{x - (2 + \sqrt{2-a})\}$$

の符号と一致する. よって, $f'(x)$ の増減は以下のようになる.

x	$(-\infty)$	\dots	$2 - \sqrt{2-a}$	\dots	$2 + \sqrt{2-a}$	\dots	(∞)
$f''(x)$			+	0	-	0	+
$f'(x)$			\nearrow		\searrow		\nearrow

今, 方程式 $f'(x) = (-x^2 + 2x - a)e^{-x} = 0$ について, x の 2 次方程式 $-x^2 + 2x - a = 0$ は異なる 2 つの実数解

$$x = 1 \pm \sqrt{1-a}$$

2024 立命館大学 (2/2 実施 全学統一 (理系)) 理系数学 解答例

をもち、この小さい方を α_1 、大きい方を α_2 とすると、 $f'(x)$ の符号は以下ようになる。

$$\begin{cases} f'(x) < 0 & (x < \alpha_1, \alpha_2 < x \text{ のとき}) \\ f'(x) = 0 & (x = \alpha_1, \alpha_2 \text{ のとき}) \\ f'(x) > 0 & (\alpha_1 < x < \alpha_2 \text{ のとき}) \end{cases}$$

このことと $f'(x)$ の増減表より、 $f'(x)$ の最大値を与える x は

$$x = 2 - \sqrt{2-a}$$

である。

カ 「部分積分法」を用いると、

$$\begin{aligned} \int f(x)dx &= \int (x^2 + a)e^{-x} dx \\ &= (x^2 + a)(-e^{-x}) - \int 2x(-e^{-x})dx = -(x^2 + a)e^{-x} + \int 2xe^{-x} dx \\ &= -(x^2 + a)e^{-x} + 2x(-e^{-x}) - \int 2(-e^{-x})dx = -(x^2 + a)e^{-x} - 2xe^{-x} - 2e^{-x} + C \\ &= (-x^2 - 2x - a - 2)e^{-x} + C \quad (\text{ただし, } C \text{ は積分定数}) \end{aligned}$$

であるから、 $f(x)$ の原始関数の 1 つである $g(x)$ も、定数 D を用いて

$$g(x) = (-x^2 - 2x - a - 2)e^{-x} + D$$

と書けて、

$$g(x)e^x = -x^2 - 2x - a - 2 + De^x$$

となる。

これが x の多項式になるから、 $D = 0$ とわかる。

よって、 $g(x) = \int_0^x f(t)dt \cdots [1]$ が成り立つとき、

$$\begin{aligned} g(0) &= \int_0^0 f(t)dt = 0 \\ -a - 2 &= 0 \\ a &= \underline{\underline{-2}} \end{aligned}$$

が成り立ち、逆にこのとき、 $[1]$ が成り立つ。

キ $g(x) = 0$ を言い換えると

$$-x^2 - 2x - a - 2 = 0 \quad \cdots [2]$$

であり、これが異なる 2 つの実数解をもつ条件を求めればよい。よって、

$$\begin{aligned} (-1)^2 - (-1)(-a - 2) &> 0 \\ \underline{\underline{a < -1}} \end{aligned}$$

が求める必要十分条件となる。

ク **オ** のところで調べた $f'(x)$ の符号より、

$$S_1 = \int_{\alpha_1}^{\alpha_2} f'(x)dx = [f(x)]_{\alpha_1}^{\alpha_2} = f(\alpha_2) - f(\alpha_1)$$

とわかる。

2024 立命館大学 (2/2 実施 全学統一 (理系)) 理系数学 解答例

次に, $a < -1$ のとき, [2] の異なる 2 つの実数解は

$$x = -1 \pm \sqrt{-1-a}$$

であり, この小さい方を β_1 , 大きい方を β_2 とおくと, [オ] のときと同様に考えて, $g(x)$ の符号は以下のようにわかる.

$$\begin{cases} g(x) < 0 & (x < \beta_1, \beta_2 < x \text{ のとき}) \\ g(x) = 0 & (x = \beta_1, \beta_2 \text{ のとき}) \\ g(x) > 0 & (\beta_1 < x < \beta_2 \text{ のとき}) \end{cases}$$

これより,

$$\begin{aligned} S_2 &= \int_{\beta_1}^{\beta_2} g(x) dx = \int_{\beta_1}^{\beta_2} (-x^2 - 2x - a - 2)e^{-x} dx \\ &= \left[(-x^2 - 2x - a - 2)(-e^{-x}) \right]_{\beta_1}^{\beta_2} - \int_{\beta_1}^{\beta_2} (-2x - 2)(-e^{-x}) dx \\ &= \left[(x^2 + 2x + a + 2)e^{-x} \right]_{\beta_1}^{\beta_2} - \int_{\beta_1}^{\beta_2} (2x + 2)e^{-x} dx \\ &= \left[(x^2 + 2x + a + 2)e^{-x} \right]_{\beta_1}^{\beta_2} - \left\{ \left[(2x + 2)(-e^{-x}) \right]_{\beta_1}^{\beta_2} - \int_{\beta_1}^{\beta_2} 2(-e^{-x}) dx \right\} \\ &= \left[(x^2 + 4x + a + 6)e^{-x} \right]_{\beta_1}^{\beta_2} \end{aligned}$$

となり,

$$h(x) = (x^2 + 4x + a + 6)e^{-x}$$

とおくと,

$$S_2 = h(\beta_2) - h(\beta_1)$$

となる.

ここで, $-a = A$ と置き換えると,

$$\begin{aligned} \frac{S_2}{S_1} &= \frac{h(\beta_2) - h(\beta_1)}{f(\alpha_2) - f(\alpha_1)} = \frac{(\beta_2^2 + 4\beta_2 - A + 6)e^{-\beta_2} - (\beta_1^2 + 4\beta_1 - A + 6)e^{-\beta_1}}{(\alpha_2^2 - A)e^{-\alpha_2} - (\alpha_1^2 - A)e^{-\alpha_1}} \\ &= \frac{2(1 + \sqrt{A-1})e^{1-\sqrt{A-1}} - 2(1 - \sqrt{A-1})e^{1+\sqrt{A-1}}}{2(1 + \sqrt{A+1})e^{-1-\sqrt{A+1}} - 2(1 - \sqrt{A+1})e^{-1+\sqrt{A+1}}} \\ &= \frac{\left(\frac{1}{\sqrt{A}} + \sqrt{1 - \frac{1}{A}}\right)e^{2-\sqrt{A-1}-\sqrt{A+1}} - \left(\frac{1}{\sqrt{A}} - \sqrt{1 - \frac{1}{A}}\right)e^{2+\sqrt{A-1}-\sqrt{A+1}}}{\left(\frac{1}{\sqrt{A}} + \sqrt{1 + \frac{1}{A}}\right)e^{-2\sqrt{A+1}} - \left(\frac{1}{\sqrt{A}} - \sqrt{1 + \frac{1}{A}}\right)} \\ &\quad \text{(分母分子を } 2\sqrt{A}e^{-1+\sqrt{A+1}} \text{ で割った)} \\ &= \frac{\left(\frac{1}{\sqrt{A}} + \sqrt{1 - \frac{1}{A}}\right)e^{2-\sqrt{A-1}-\sqrt{A+1}} - \left(\frac{1}{\sqrt{A}} - \sqrt{1 - \frac{1}{A}}\right)e^2 e^{\frac{-2}{\sqrt{A-1}+\sqrt{A+1}}}}{\left(\frac{1}{\sqrt{A}} + \sqrt{1 + \frac{1}{A}}\right)e^{-2\sqrt{A+1}} - \left(\frac{1}{\sqrt{A}} - \sqrt{1 + \frac{1}{A}}\right)} \end{aligned}$$

となるから,

$$\lim_{a \rightarrow -\infty} \frac{S_2}{S_1} = \lim_{A \rightarrow \infty} \frac{S_2}{S_1} = \frac{0 - (-1) \cdot e^2 \cdot 1}{0 - (-1)} = e^2$$

となる.

IV

- [1] ア $\frac{1}{2}(X_1 + X_2)$ イ $\frac{1}{3}(X_1 + X_2 + X_3)$
- ウ $(1, 1)$ エ $\frac{1}{n}(X_1 + X_2 + X_3 + \cdots + X_n)$
- [2] オ $\frac{1}{2}$ カ $\frac{1}{4}$ キ $\frac{1}{8}$
- ク $\frac{37}{256}$ ケ $\frac{1}{2}$
- [3] コ $(1-p)^n$ サ $\frac{2}{n}$

■解説□

$$a_n = \begin{cases} X_1 & (n = 1 \text{ のとき}) \\ a_{n-1} - \frac{1}{n}(a_{n-1} - X_n) & (n \geq 2 \text{ のとき}) \end{cases} \cdots \textcircled{1}$$

[1] ①に $n = 2$ を代入すると,

$$a_2 = a_1 - \frac{1}{2}(a_1 - X_2) = \frac{1}{2}(a_1 + X_2) = \frac{1}{2}(X_1 + X_2) \quad \cdots \textcircled{2}$$

①に $n = 3$ を代入すると,

$$a_3 = a_2 - \frac{1}{3}(a_2 - X_3) = \frac{1}{3}(2a_2 + X_3) = \frac{1}{3}(X_1 + X_2 + X_3) \quad \cdots \textcircled{3}$$

さらに, ①より,

$$a_{n+1} = a_n - \frac{1}{n+1}(a_n - X_{n+1}) \quad (n \geq 1)$$

$$(n+1)a_{n+1} = na_n + X_{n+1}$$

$b_n = na_n$ より,

$$b_{n+1} = b_n + X_{n+1}$$

よって, $(p, q) = (1, 1)$

$b_{n+1} - b_n = X_{n+1}$ より, 数列 $\{b_n\}$ の階差数列の第 n 項は X_{n+1} であるから, $n \geq 2$ のとき,

$$\begin{aligned}
 b_n &= b_1 + \sum_{k=1}^{n-1} X_{k+1} \\
 &= a_1 + X_2 + X_3 + \cdots + X_n \\
 &= X_1 + X_2 + X_3 + \cdots + X_n \quad \cdots \textcircled{4}
 \end{aligned}$$

$n = 1$ のとき, $b_1 = X_1$

$b_1 = 1 \cdot a_1 = X_1$ であるから, ④は $n = 1$ のときも成り立つ.

したがって,

$$\begin{aligned}
 b_n &= X_1 + X_2 + X_3 + \cdots + X_n \\
 a_n &= \frac{b_n}{n} = \frac{1}{n} \underbrace{(X_1 + X_2 + X_3 + \cdots + X_n)}_{\text{エ}}
 \end{aligned}$$

[2] 各 n について, 表が出る確率は常に $\frac{1}{2}$ である.

$a_2 = 1$ となる確率は, ②より

$$a_2 = 1 \iff X_1 + X_2 = 2 \iff \text{1回目, 2回目いずれも表が出る}$$

であるから, $\left(\frac{1}{2}\right)^2 = \frac{1}{4}$

$a_3 = 0$ である確率は, ③より

$$\begin{aligned}
 a_3 = 0 &\iff X_1 + X_2 + X_3 = 0 \\
 &\iff \text{1回目, 2回目, 3回目すべて裏が出る}
 \end{aligned}$$

であるから, $\left(\frac{1}{2}\right)^3 = \frac{1}{8}$

$a_8 \leq \frac{1}{4}$ となる条件は,

$$\begin{aligned}
 a_8 \leq \frac{1}{4} &\iff X_1 + X_2 + \cdots + X_8 \leq 2 \\
 &\iff \text{8回の試行において, 表が出る回数が2回以下}
 \end{aligned}$$

であり, 8回の試行において

表が出る回数が0回の確率: $\left(\frac{1}{2}\right)^8$

表が出る回数が1回の確率: ${}_8C_1 \left(\frac{1}{2}\right) \left(\frac{1}{2}\right)^7 = 8 \left(\frac{1}{2}\right)^8$

表が出る回数が2回の確率: ${}_8C_2 \left(\frac{1}{2}\right)^2 \left(\frac{1}{2}\right)^6 = 28 \left(\frac{1}{2}\right)^8$

であるから、求める確率は、

$$\left(\frac{1}{2}\right)^8 + 8\left(\frac{1}{2}\right)^8 + 28\left(\frac{1}{2}\right)^8 = \frac{37}{256}$$

n が奇数のとき、 $a_n \leq \frac{1}{2}$ である条件は、 $n = 2m - 1$ (m は自然数) とすると、

$$\begin{aligned} a_{2m-1} \leq \frac{1}{2} &\iff X_1 + X_2 + \cdots + X_{2m-1} \leq \frac{2m-1}{2} \\ &\iff 2m-1 \text{ 回の試行において、表が出る回数が } m-1 \text{ 回以下} \end{aligned}$$

であるから、求める確率を先ほどと同様に計算すると、

$$\begin{aligned} &\left(\frac{1}{2}\right)^{2m-1} + {}_{2m-1}C_1 \left(\frac{1}{2}\right) \left(\frac{1}{2}\right)^{2m-2} + {}_{2m-1}C_2 \left(\frac{1}{2}\right)^2 \left(\frac{1}{2}\right)^{2m-3} + \cdots + {}_{2m-1}C_{m-1} \left(\frac{1}{2}\right)^{m-1} \left(\frac{1}{2}\right)^m \\ &= \left(\frac{1}{2}\right)^{2m-1} ({}_{2m-1}C_0 + {}_{2m-1}C_1 + {}_{2m-1}C_2 + \cdots + {}_{2m-1}C_{m-1}) \\ &= \left(\frac{1}{2}\right)^{2m-1} \cdot \frac{1}{2} \left\{ ({}_{2m-1}C_0 + {}_{2m-1}C_1 + {}_{2m-1}C_2 + \cdots + {}_{2m-1}C_{m-1}) \right. \\ &\quad \left. + ({}_{2m-1}C_{m-1} + {}_{2m-1}C_{m-2} + \cdots + {}_{2m-1}C_1 + {}_{2m-1}C_0) \right\} \\ &= \left(\frac{1}{2}\right)^{2m} ({}_{2m-1}C_0 + {}_{2m-1}C_1 + {}_{2m-1}C_2 + \cdots + {}_{2m-1}C_{m-1} \\ &\quad + {}_{2m-1}C_m + {}_{2m-1}C_{m+1} + \cdots + {}_{2m-1}C_{2m-2} + {}_{2m-1}C_{2m-1}) \\ &= \left(\frac{1}{2}\right)^{2m} (1+1)^{2m-1} \\ &= \left(\frac{1}{2}\right)^{2m} \cdot 2^{2m-1} \\ &= \frac{1}{2} \end{aligned}$$

ケ の 別解

$$a_n \leq \frac{1}{2} \iff X_1 + X_2 + \cdots + X_n \leq \frac{n}{2}$$

n 回の試行において、表が k 回、裏が $n-k$ 回出る確率は ${}_nC_k \left(\frac{1}{2}\right)^k \left(\frac{1}{2}\right)^{n-k}$ 、

表が $n-k$ 回、裏が k 回出る確率は ${}_nC_{n-k} \left(\frac{1}{2}\right)^{n-k} \left(\frac{1}{2}\right)^k = {}nC_k \left(\frac{1}{2}\right)^k \left(\frac{1}{2}\right)^{n-k}$ であるから、

両者の確率は等しい。

したがって、表が $0, 1, \dots, \frac{n-1}{2}$ 回出る確率の和 p_1 と、表が $\frac{n+1}{2}, \frac{n+3}{2}, \dots, n$ 回出る確率の和 p_2 も等しい。

また、表が出る回数のとりうる値は $0, 1, 2, \dots, n$ であるから、

$$p_1 + p_2 = 1$$

これらより, $p_1 = p_2 = \frac{1}{2}$ である.

よって, 求める確率は, $p_1 = \frac{1}{2}$

[3] $a_n = 0$ である条件は,

$$a_n = 0 \iff X_1 + X_2 + \cdots + X_n = 0$$

$\iff n$ 回の試行において, すべて裏が出る

であり, 裏が出る確率は $1 - p$ であるから, 求める確率は $(1 - p)^n$

$na_n = 2$ となる条件は,

$$na_n = 2 \iff X_1 + X_2 + \cdots + X_n = 2$$

$\iff n$ 回の試行において, 表が出る回数が 2 回

である. $na_n = 2$ となる確率を $P(p)$ とすると,

$$P(p) = {}_n C_2 p^2 (1 - p)^{n-2} \quad (n \geq 2)$$

$n = 2$ のとき, $P(p) = p^2$ であるから, $0 \leq p \leq 1$ において $P(p)$ が最大になるのは $p = 1$ のとき.

$n \geq 3$ のとき,

$$\begin{aligned} P'(p) &= {}_n C_2 \{2p(1 - p)^{n-2} + p^2(n - 2)(1 - p)^{n-3}(-1)\} \\ &= {}_n C_2 p(1 - p)^{n-3} \{2(1 - p) - (n - 2)p\} \\ &= {}_n C_2 p(1 - p)^{n-3} (2 - np) \end{aligned}$$

p	0	...	$\frac{2}{n}$...	1
$P'(p)$		+	0	-	
$P(p)$		↗	最大	↘	

したがって, $0 \leq p \leq 1$ において $P(p)$ が最大になるのは $p = \frac{2}{n}$ のときであり, これは $n = 2$ のときも成り立つ.

よって, $na_n = 2$ となる確率が最も高くなるのは, $p = \frac{2}{n}$ のときである.